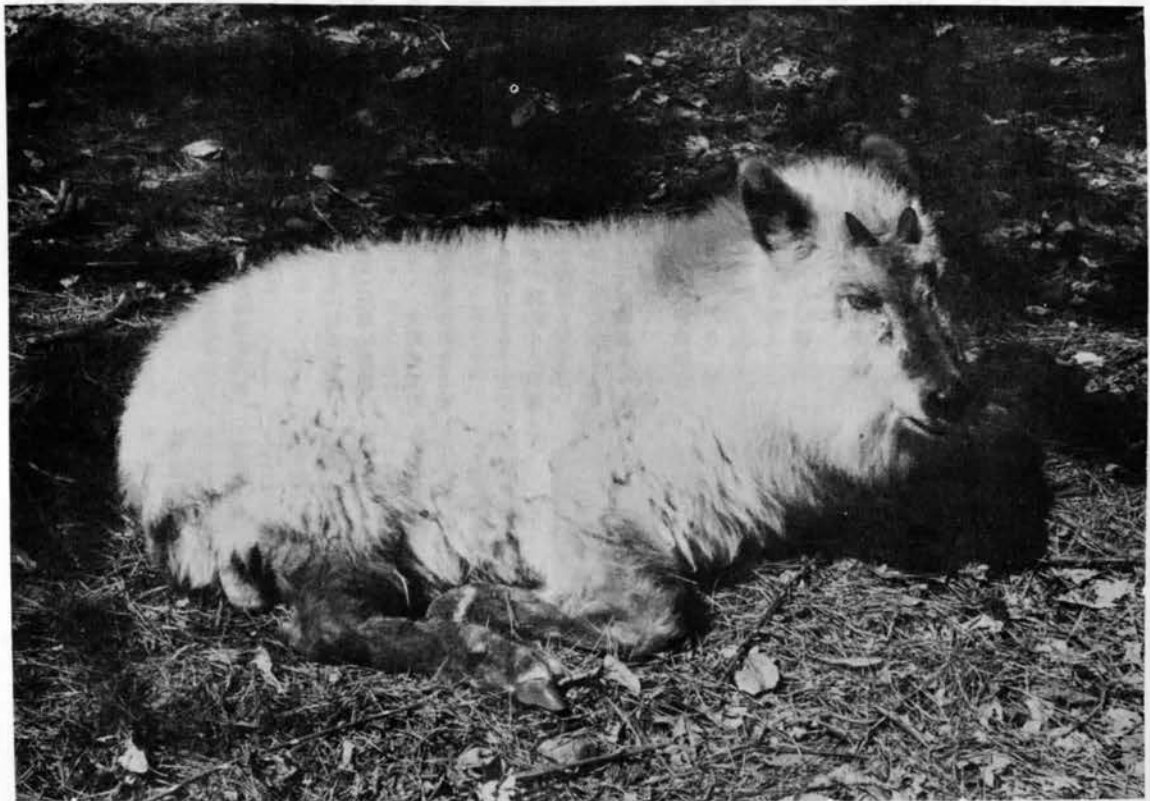


# 山と博物館

第22巻 第5号 1977年5月25日 大町山岳博物館



ありし日の「岳子」

51.4.8

撮影 千葉 彬 司

## 岳子のこと

岳子が死亡した事が、新聞等で報導される  
と、市民の方々をはじめ多くの人から丁重  
なおくやみをいただきました。  
誠にありがたい事と館員はじめ、関係者一  
同感謝いたしております。  
ここに「岳子」の名付け親の一人からの  
手紙を載せさせていただきます。

編集部

さわやかなすこしよい季節となりました。  
御地の野山もせいに新緑となり、すばら  
しいながめと御想像申し上げます。

突然のおたよりで失礼とは存じますが、  
聞でカモシカの岳子ちゃんがなくなった事、  
拝見いたしました。

もうあれから二十一年もの歳月がすぎたの  
かと、あまりのなつかしさにペンをとった次  
第です。

と申しますのは、三十一年二月、当時私は  
大町におりました。

カモシカの赤ちゃんの名前の募集がござい  
まして、「岳子」と応募し当選いたしました。  
つまり、名付け親という事になりましたよ  
うか。

一緒に考えてくれた父(当時、大町営林署  
長)も昨年三月永眠いたしました。

その後、大町南高校の教職にあつた主人と  
結婚いたしました、三十四年こちらに参りま  
した。

主人も大町をとてなつかしがり、よくい  
ろいろと大町の事が話題にのぼります。

お花でも供えて上げていただきたく、わす  
かではございますが同封いたしました。

よろしくお願いたします。  
ますく、貴館のご発展をお祈りして、失  
礼いたします。

五月十五日

(愛知県豊明市 古居政子)

# 岳子の歩んだ21年

千葉彬司

昭和52年5月13日早朝、カモシカ「岳子」が死亡しました。

当館での飼育カモシカ第1号であり、その飼育日数は、21年3カ月11日でした。

この間、市民のみなさんをはじめ、多くの方々々に愛され親しまれてきました。

また、私達には数多くの貴重な資料を提供してくれました。

私達はこの白い美しい毛並の「岳子」を永久保存するために剝製にすることにしました。

ここに、岳子が歩んだ道のりを記し、今まで寄せられました多くの方々のご好意に感謝いたします。

## 岳子入園

昭和31年の2月2日、岳子は、長野県南安曇郡安曇村稲核の郵便局長、前田英一郎さん宅の裏庭の生垣のツバキ(後にマサキとわかつた)後述)を食べているところを地元の人々に保護されました。

保護された当時岳子は角も生えていない子



保護された当時の岳子 31年2月

供で別に人を恐がることもなく、大町までのトラック輸送の時も、助手席で抱かれたまま静かにしていました。

博物館では既にカモシカを飼育する予定で飼育舎は作られていましたが、体の小さい岳子が、厳しい冬の寒さの中で暖房も何もない小舎の中で生きていけるのかどうか皆不安でした。そこで夜は宿直室で岳子は職員と一緒に寝ることになりました。

岳子に与えるエサについては上野動物園に電話を入れ、サゼクションをいただき、後日飼料表を送ってもらいました。

しかし、子供のカモシカに何を与えてよいのかは上野でも余りよくわからない様子でした。

私達は岳子が保護当時、ツバキの葉を好んで食べていたことを考え、とりあえずえ付けにはツバキの葉を使うことにしました。

しかし、大町には庭に植え込んだ観賞用のもの以外に自生しているツバキはありません。そこで私達は花屋まわりをすることにしました。花屋のいけ花用のツバキを買いつけてもらったのです。バケツに水差しにして保存しました。岳子はよるこんでそれを食べました。

生け花用としてのツバキをエサにする訳です。一週間もすると花屋のツバキは品切れ

となりました。

そんな時、雪の上に青々とした緑の葉をつけたマサキの枝を博物館の周囲にみつければいい。

試しにマサキを岳子に与えてみました。岳子はマサキもよるこんで食べました。

ツバキがマサキに替った事は言うまでもありません。

マサキでしたらこの地方では生垣として利用しているところが沢山あったからです。

マサキのほかにはリンゴや野菜を細かくきざんだものもよく食べました。

また「岳子」という愛称も、保護されて間もなく一般公募したもので、その後入園したり、出生したカモシカの愛称は一般公募することになりました。

飼育舎の前面は金網張りでしたから、寒風

や雪が吹きこみます。

私達はそこにムシロを吊し、昼は巻き上げるようにしました。

陽差しの暖かくなった3月、岳子は夜も小舎の中で休むようになりました。

私達はよく岳子を小舎から出して園内を散歩させました。岳子はまるで小犬のようにコロコロと職員の後にくっついて歩きました。

そして春の遅い北アの麓にサクラの花が咲く頃、岳子には可愛い角がはえはじめていました。

## 夏と岳子

新緑の候になると岳子は、青葉若葉をもちり食べ見違えるほど元気になりました。

元気になると共に、三・六歳×三・六歳の飼育舎はいかにも狭く感じられました。

私達は岳子が運動不足になることを心配して、ヒマをみては小舎の外に連れ出しました。

最初は恐る／＼パーゴラガーデンの浅い池の中に入ったのですが、そのうちに水しぶきを上げてはしゃいだり、そうかと思うと、付属動物園で飼われているタヌキ舎をけんそうにのぞきこみ、タヌキにおどろかされて一目散に自分の小舎に逃げ帰ったりもしました。

やがて夏がきました。

カンカン照りの暑い日、岳子は小舎の片隅に座ったまま荒い呼吸をし食欲もすっかりなくなっていました。トタン張り屋根の飼育舎の中はむせかえる暑さです。

中の気温を少しでも下げようと水槽には水がはられ、蛇口は一杯に開かれて白い飛沫を上げていますが、その程度ではこの暑さはどうなるものでもありません。

私達は暑い日が1日も早く過ぎ去ってくれることを願うのみでした。



川の中で遊ぶ岳子 36年



館庭を散歩 後方左手岳子の飼育舎 36年

そして1日も早く広い涼しい飼育舎がほしいと思ったものです。(後に国庫補助を得て新放養園が作られることになる)

ようやく暑い夏が過ぎると共に、岳子は元氣と食欲を増してきて私達をほっとさせました。

これは、その2、3年後の夏の出来事です。岳子を散歩に連れだした職員が全身ビシヨヌレで帰ってきました。

岳子は体も大きくなったので、散歩に出る時は、用心のため体にヒモをつけられていました。

また当時の博物館の裏手には川が流れていました。

岳子をはじめ恐る／＼川の中に入ったのですが、涼しくて気持が良かったのでしようかやがて川の中を走りだしたのです。

その結果、タズナを持った職員も共に水浴びのお供をさせられたのです。

皇太子殿下と岳子

昭和36年3月27日早朝、私達はうつつりと

今朝降ったばかりの雪の中で、現在も博物館庭にある「東屋」に手すりを取りつける作業をしていました。

今日は皇太子殿下が博物館をご見学になられる日。私達が手すりを取りつけていた東屋は、その日1日だけ岳子の飼育舎にするための作業だったので。

満5歳を迎えた岳子は、皇太子殿下がおみえになる直前にそこへ移されました。

殿下は白い美しい毛並の岳子を見ながら係に次々と質問をされていきました。

その時、脇からマサキの小枝がサツと殿下の方へ差し出されました。

殿下はその小枝をお受け取りになり、岳子に差し出すと、岳子は殿下が係に質問されている間に食べつくしました。

もつとも岳子にしてみれば、朝食抜きで連れて来られた訳ですから、とんだ迷惑だと思っただけかも知れません。

しかし、全国の飼育カモシカの数ある中で皇太子殿下からえさをもらったのは岳子くらいのものでしょう。

51年2月に東宮御所に参上し、カモシカについてご進講申し上げました折にも、殿下は「あの白いカモシカは元氣ですか」と、岳子のお話を聞いていただきました。

岳子は、映画にも出演しました。

映画内容の評価はともかく、長編動物映画「白山脈」という作品で、大町市民をはじめ多くの方が見たことと思います。

また、他のカモシカと違って岳子は小さな時から人に接していたためか見知らぬ人が飼育舎の中に入っても、攻撃するような事はありませんでした。

動物われら皆兄弟”と思っていたのかも



皇太子殿下からマサキをもらう岳子 36年3月27日

知れません。

独身をとす

私達は岳子をいつまでも独身でおくつもりはありませんでした。

しかし、当時、カモシカを飼育していたところは、多摩動物公園でメス1頭、大坂天王寺動物園のメス1頭、大町のメス2頭、の合計4頭、しかもメスばかりでは交換してツガイを作るわけにもいきません。

そのうち、多摩動物園にオスが1頭入園したことを知り、大町のメス(房子)と交換の話しが持上りましたが、実施直前に房子が病死し、この計画はあえなく消え去りました。

私達は岳子のオムコさんを探すため、カモシカについての情報に耳をそばだてていました。

そこへ、耳よりな情報が文化財保護委員会

(現文化庁)からもたらされました。

日本ではじめて航空機を利用して運んだ、このオスカモシカ「青太郎」も人工哺育の段階で死亡してしまいました。しばらくは私達もシュンとしていました。

青太郎が死亡して2年後、私達は許可を得て、北アルプスでオスカモシカの捕獲作戦を実施しましたが、これも見事に失敗してしまいました。岳子はおムコさんを迎えることもなく、月日は過ぎて行くばかりでした。

岳子が10歳になった昭和40年、待望のオスカモシカが入園しました。

また、このオスカモシカ「大助」は人工哺育成功第1号でもありました。

岳子との年齢差は10歳、私達は大助の人工哺育の際、試みに岳子の飼育場の中へ大助を一回入れてみました。



新設された放養園の岳子 41年

岳子が近づくくと大助は恐がって逃げました。そこは大人と子供の足の違いです。すぐに追いつかれ大声を上げて助けを求めました。私達は大助の生長を待つことにしましたが、このことがあってからは、金網の仕切があっても、大助は岳子が近づくくと一目散に逃げてしまいました。

大助が2歳になった時、私達は再び大助と岳子と一緒にしてみました。

大助は立派な若オスに生長していました。岳子は大助を目ざとくみつけると走り寄ってきましたが、それを見つけた大助は猛然と逃げたのです。

子カモシカの時とは違います。岳子が懸命に追ってもその距離はちぢまりません。

何回か同じような事を繰り返して、とうとう岳子は見守る私達の所へ帰ってきてしまったのです。

これではどうも一緒にしようがありません。その後、年老いたオスが入園しました。体に手がふれるとゆっくり振りかえる、おっとりとした老カモシカの横の飼育舎に私達は岳子を移しました。

大助の例もありましたので私達は金網越しのお見合をさせたのです。

お互いに姿をみつけると近ずき鼻をひくひくさせています。

そのうち岳子は何を思ったのか、頭を下げるとオスカモシカに向けてグリーンと突き上げたのです。

両者共、金網がクニヤクニヤになつても角突きあいを続けたのです。

この様な事があってから、私達は岳子のオムコさんのことはあきらめたのです。

51年の3月、ひよっこりと安曇村の前田英一郎さんが博物館を訪れました。

そこで前田さんは、実に20年ぶりに岳子に会ったのです。

前田さんは、かつて岳子が食べていた生垣の青葉をおみやげに持ってきてくれました。(これは調べた結果、ツバキではなくマサキでした)

岳子は前田さんとその子供さんをながめながら、そのマサキをおいしそうに食べたのです。

勿論、前田さんの子供さん達は岳子に会うのははじめてのことでした。岳子が保護された時まだ子供さん達は生まれていなかったのですから、

**21年目の春**

今年の1月5日朝、岳子が右足を引きずっているのを私達はみつけれ

した。



雑誌「山と溪谷」の表紙にも登場した岳子

それから11日目の5月13日、岳子はひっそりと生命の灯を消しました。

× × ×

岳子が保護された昭和31年当時は、山に入ってもカモシカの姿をみかけるのはまれでした。そして、カモシカを飼育することは大変難かしいとされ、飼育下の繁殖などは思いもよらぬことでした。

しかし、今では繁殖した仲間が外国にも渡り、更に

昨日までは何んともなかつたのに。私達は早速獣医を呼びました。

結果は、右前肢上腕部骨折、治療の方法は自然治癒を待つしかないとの診断でした。

痛み止めと、化膿防止のための治療は施されたものの、右肢を引きずるようにして歩く姿は痛々しい限りでした。

私達は岳子の骨折の原因をいろいろ考えましたが、ひづめを金網に引っかけたためとしか推測できませんでした。

岳子は骨折後、保護舎の接続している飼育舎に移されました。

そしてエサも好物のマサキ、リングなどの特別食に切り替えられ、夜間は保温設備のある保護舎に収容されるようになりました。

4月に入り木の芽が萌えだすと、私達は毎日日芽をつんできました。

しかし、5月2日、岳子はとうとう立上ることができなくなり、坐ったままの生活になってしまいました。

### 博物館だより

小鳥の声を聞く会  
5月14・15日と小鳥の声を聞く会が開かれ約100名が参加しました。

山と博物館 第22巻 第5号

発行所 長野県大町市TEL②〇二二

印刷所 大町市下仲町 山と博物館

定価 年額 八〇〇円 (送料共) (切手不可)

郵便振替口座番号 (長野二二、二九三)